

『#灼熱の魂』(2010年: トゥニ・ヴィルヌーヴ監督)をamazon prime videoで視聴した。本作はワジディ・ムアワット(Wajdi Mouawad)の戯曲『焼け焦げるたましい(Incendies: 戦火)』の映画化。2010年トロント国際映画祭・最優秀カナダ映画賞を受賞した。すごい映画だ！

カナダ・ケベック州。母子家庭で育ったアラブ系の女子大生Jは、母親ナワルの急死により、双子の弟Sと共に遺言書を受け取った。それはナワルが死の床で口述した文章で、棺に入れずに裸で埋葬し、墓碑も建てるなど記されていた。墓碑を建てなければ、同封した2通の手紙を父親と兄に届けろと指示される双子。だが、双子は父の名を知らず、兄がいることも聞いていなかった。母の意思に従い、父たちを探すため中東に旅立つJ。弟のSは、変わり者で理解しづらい性格だった母に反発し、カナダから動かなかった。

35年前、中東ではキリスト教徒とイスラム教徒が激しく対立していた。若いナワルが暮らすキリスト教徒の村の近くには、隣国を追われたイスラム教徒の難民キャンプがあった。難民のムスリムの青年と愛し合い、妊娠するナワル。ナワルの兄弟は、この恋を一族の恥と見なして青年を射殺し、ナワルも殺そうとした。祖母に命を救われ、町の叔父の家から大学に通うよう指示されるナワル。生まれた息子は生後すぐに孤児院に預けられ、Nと名付けられた。

数年後、ナワルの国はキリスト教徒とイスラム教徒の間に内戦状態に陥った。孤児院のある南部の戦闘が激しいと知り、一人で南部に向かうナワル。だが、孤児院は焼け落ち、息子を知るすべは無かった。イスラム教徒の女子供まで虐殺するキリスト教徒の兵士たちを激しく憎んだナワルは、イスラム教徒の側につき、キリスト教徒である政府の要人に接近して射殺した。

母親の故郷の村を探し当てるJ。だが、村の女たちはナワルを一族の恥と呼び、Jを追い出した。母が15年間も監獄に収監されていた事を知るJ。ナワルは拷問を受けても屈せず、いつも歌っていたために「歌う女」と呼ばれ、イスラム教徒たちからは尊敬される存在だった。

20年前、洗脳されない強情なナワルを痛めつける為に、凄腕の拷問人が監獄に派遣され、レイプされ、獄中で子供を生んでから釈放されるナワル。JとSは、その時に生まれた双子だったのだ。

徐々に詳細が明らかになってゆく。JとSは果たして、父と兄を探し当てることができるのか。そして、母から託された手紙を手渡すことができるのか。

驚愕の結末が待っている。それは？

原作は、レバノン内戦を背景にした壮絶な家族の物語であり、記憶・アイデンティティ・沈黙の重みを描いた現代悲劇である。ギリシャ悲劇の構造を踏襲している（オイディプス王を彷彿とさせる）。久々に観た余韻の残る名画であった。

評価：★★★★★+α